伊那弥生ケ丘高等学校
校長通信 ～知徳兼ねつつ たくましく～
第15号
令和8年 10 月 16 日

修学旅行事前学習・・・被爆体験者と伝承者からのメッセージ

10 月 15 日（木）、総合的な学習の時間とＬＨＲを組み合わせ、学年ごとの活動が行われました。１年生は地域で活動する方々から８分野の講師を招き、地域課題を学びました。２年生は広島修学旅行の事前学習として、被爆体験の講話から平和について考えました。３年生はプレコンセプションケア教育の専門家として長野県看護大学から講師を招き、「命の授業」を受講しました。このうち、２年生の様子を紹介します。

修学旅行と平和学習　２年生は 12 月初旬に予定されている修学旅行で広島平和公園を訪れ、平和記念資料館を見学します。以前は、他校でも現地で会場を借用し、被爆体験者から直接お話を聞くことが一般的でした。長崎も同様でした。しかし、昨今は会場確保の難しさ、ご存命の体験者が年々減少していること等の理由から、今回のような形式での実施にしています。

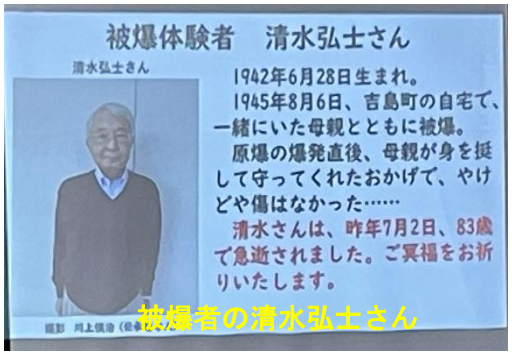


伝承者の川上慎治先生

被爆体験証言者と伝承者　講師の川上慎治先生は、鳥取県の小中学校で教鞭をとられ、その間の教育実践や関心などから、退職後は公園内にある国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の「被爆体験伝承者等派遣事業」に登録、委嘱され、資料館内でのガイドや全国各地で伝承講話の講師を務めています。昨年、全身がんのために 83 歳で急逝された体験証言者の清水弘士さんの体験を伝承しています。

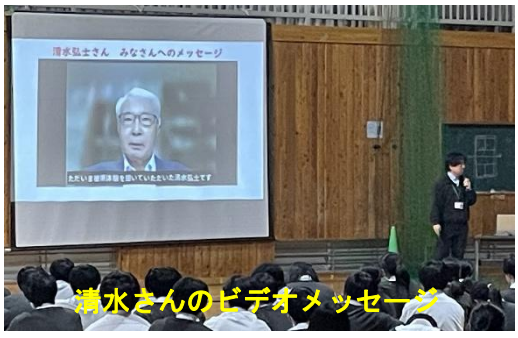

熱心に聴く生徒

清水さんの被爆体験　1945 年 8 月 6 日、３歳の時に爆心から 1.6 ㎞離れた自宅で被爆しました。被爆者に共通するのは、そこからの人生が本当に辛かったということです。やけど・負傷、原爆症、食糧確保、風説による差別。特に 1957 年に原爆医療法が成立して法的援護が始まるまでの「空白の 10 年」は、鼻血や頭痛、倦怠感などに毎日悩まされました。1961 年の旧ソ連による大気圏内核実験の後、初めて被爆者であることを自覚しました。そして、70 歳の時、福島第一原発の事故を受けて、本格的な証言活動に取り組みます。その後、広島県被団協事務局長、日本被団協（2024 年ノーベル平和賞）役員を務めました。



被爆者の清水弘士さん

メッセージ　生前に撮影されたビデオでは、「私たちで終わりにしよう。ノーモア・ヒバクシャ、ノーモア・ウォー。」「自国の戦争を止めることができるのは、その国の市民だけ。」という若い世代に向けた言葉が語られました。伝承者からは、原爆投下に至る背景なども説明があり、歴史的にもわかりやすい内容でした。現地での有意義な学びに期待します。



清水さんのビデオメッセージ